第５章
高岡短期大学の閉学と富山大学・芸術文化学部への移行を控えて

平成17年10月、高岡短期大学は、県内３大学の再編統合により富山大学・芸術文化学部に移行し４年制の大学になることとなった。蠟山昌一第３代学長の急逝により多難な時期の学長の任に当たったのが現在の西頭徳三第４代学長である。

国立大学は、独立行政法人化への動きとともに、全国各地での再編統合と、高等教育機関の大きな改革の流れの中にあった。そして、高岡短期大学では、平成16年４月に国立大学法人となり、それと平行して県内の国立３大学による再編統合への会議が持たれた。再編統合の会議の当初には、本学の特徴を生かした短期大学２年、専攻科２年、大学院２年の「２＋２＋２」構想もあった。しかし、数々の議論の末、新しく４年制の学部とし教育・研究と地域貢献、社会貢献を理念とする芸術文化学部をもって芸術・文化の向上に大きく寄与することを教育と研究の目標としている。

平成18年４月に、新学部の第１期生を迎えることになる。高岡短期大学が、22年の歴史の中で培ってきた多くの教育・研究の成果や実績、それとともに地域住民との交流による地域文化の向上と信頼をもとにした社会貢献等が継承され、さらなる展開と発展により高岡が芸術文化の発信地になることを祈念する。

産業造形学科は高校生にどのように見られていたのか

産業造形学科長　堀江秀夫

平成17年度入学生の卒業を最後に高岡短期大学が幕を閉じるにあたり、全国の高校生には産業造形学科はどう映ったのだろうかと想像してみました。

最近３年間(平成14・15・16年度)の産業造形学科と産業デザイン学科の受験生の出身県別人数を調べたものが表１です。なお、これは第一志望を基準にしており、東京都、京都府、大阪府の受験生が多いのは、東京都立工芸高校、銅舵美術工芸高校、大阪市立工芸高校の存在に拠っています。

高岡短大の自宅通学の範囲は富山県と石川県ですから、この両県を「地元」、それ以外を「全国」と定義すると、産業造形学科の受験生は地元43%に対して全国57%、産業デザイン学科は地元67%に対して全国33%です。産業造形学科が全国から注目されていることが分かります。

この理由は、全国的に工芸関連の学科が少なく国立のため学費が最も安いことが評価され、短大ではあるもの全国から学生が集まり、また社会人入学や外国人私費留学生も多くなっているのでしょう。一方、短大ゆえに平成16年度入学生の場合、51名中39名が女子学生(76%)となっています。

もう一つの理由は、１学年50人の学科定数に対して19人の専任教員が指導し、一般の４年生大学では見られない驚くほどのマンツーマンの実技指導が行われていることだと思われます。授業は、美術・デザイン教育およびものづくりの実技教育が主体ですが、ものづくりを「製作」ではなく「制作」と書き、単なる製造技術教育ではない総合的なものづくり文化教育を目指していることが評価されているのでしょう。

また、高岡短大は、３学科と専攻科３専攻で構成され、学生数約500人、教員数約60人です。所帯が小さいゆえにきめ細かい教育が行われ、学生・教員・職員の顔が見える規模といえます。全１年生へのアンケート結果では、学内で「おはよう」の挨拶ができる家庭的な大学であることも魅力となっています。

一方、私の目からみた産業造形学科の学生は、ものづくり・デザイン好きで、大都市から見ると刺激に欠ける北陸の小都市に集まった青年なので、素朴で粘り強い学生が多く、授業態度は皆まじめです。汗まみれ・埃まみれになって実習を行う女子学生の姿は、テレビや新聞でみる若者像とは対照的で、感動的でもあります。

表１出身都道府県別受験者数

都道府県名	産業造形	産業デザイン	都道府県名	産業造形	産業デザイン
北海道	5	3	滋賀	2	1
青森	0	0	京都	17	7
岩手	0	0	大阪	21	6
宮城	1	1	兵庫	10	10
秋田	0	0	奈良	2	2
山形	0	3	和歌山	2	0
福島	1	0	鳥取	0	0
茨城	0	0	島根	0	1
栃木	0	0	岡山	9	2
群馬	1	0	広島	1	5
埼玉	8	0	山口	5	2
千葉	5	1	徳島	0	3
東京	18	5	香川	7	3
神奈川	6	0	愛媛	0	3
新潟	7	9	高知	0	0
富山	79	121	福岡	8	4
石川	50	108	佐賀	1	2
福井	5	9	長崎	2	0
山梨	1	0	熊本	3	2
長野	4	9	大分	0	1
岐阜	3	5	宮崎	0	0
静岡	3	1	鹿児島	0	5
愛知	6	2	沖縄	0	0
三重	3	4	大学入学	3	0
			計	297	340

平成17年(2005)

主なできごと

(3.18)平成16年度卒業証書授与式並びに専攻科修了証書授与式を挙行。(4.5)平成17年度入学式を挙行。(5.25)国立大学法人法の一部を改正する法律が公布され、三大学の再編統合が認められ、新・富山大学が10月１日に創設されることが認められる。(6.10)芸術文化学部創設記念東京シンポジウム開催。(6.15)合同学長選考会議で国立大学法人　富山大学の学長となるべき者の候補者として国立大学法人高岡短期大学学長の西頭徳三を選出。(7.21)初代芸術文化学部長候補者として産業デザイン学科、前田一樹教授を選出。(9.20)国立大学法人　高岡短期大学閉学式。(9.30)国立大学法人高岡短期大学閉学。((10.1)国立大学法人富山大学芸術文化学部に移行。)

回　想

産業デザイン学科長　森田　力

11年前、平成６年の７月に思いもかけず高岡短期大学産業工芸学科(当時)の教員になった。そして、その短大が富山大学と富山医科薬科大学と再編・統合する大きな節目の年度に定年になる。小生が生まれたのは皇紀2600年(1940年)、独立してデザイン事務所を作ったのが満30才、還暦を迎えたのは丁度2000年という節目の年、なぜか小生の年回りが節目の年に当たり不思議な因縁を覚える。デザイン界に関しても昭和15年という年は、C.イームズ、E・サーリネンがNY近代美術館において世界で始めて成形合板と金属パイプで製作した椅子を発表し、また、シャルロット・ペリアン女史が来日して当時の日本のデザイン界に大きな影響を与えたエポックメーキングな年でもあった。

着任の平成６年より数年前、平成元年に当時富山県に全国でもかなり早く設立された富山県インダストリアルデザインセンター(現､富山県総合デザインセンターで、当時富山県工業技術センター内にあった)の初代デザイン部長として着任していた。隣の高岡短期大学には小生の先輩の南塚豊先生(故人)、中学時代からずっと同級の宮崎先生、また、横山(故人)、矢口、沖先生など後輩が教員としておられた。昼食時間や休憩時間に度々訪問して珈琲を飲んだり、昼食を共にしたり、また、小関先生(名誉教授)が主催されていた中学、高校教員とのデザイン教育研究会についての議論に参加した。それから数年後、先輩の南塚先生がお亡くなりになり、急遽専門も年令もほぼ同じである小生に声がかかった。平成５年の大晦日の夜突然小関先生から電話があり、とにかくすぐに高岡にくるようにとのことであつた。そして次の年の７月には心の整理のつかないまま高岡短期大学への着任となってしまった。その後たった11年と短い期間であったがこの再編・統合という大きな節目の年度に退官となった。

その間、専攻科棟の施設・設備の計画、専攻科産業デザイン専攻のグループ長、平成12年の学科再編によるデザイン学科の独立、デザイン学科学科長、小関先生の退官、蠟山前学長の死など、楽しかったこと、悲しかったことなど本当にいろいろなことに携わってきた。何にもまして今回の３大学再編・統合に関して新学部設置準備委員会の一委員として参画できたこと、そして新学部の理念、教育目標、カリキュラム、施設・設備、新採用教員の人事、高校に対する広報など多くのことに微力ながらも携れたことは小生にとって大変幸運であった。その中でも蠟山前学長の死に関しては本当に辛いものがあった。蠟山学長とはよくお酒を飲んだり、山にスキーに温泉にと御一緒させていただき、多くのことを学ばせていただいた。いまだにその死が信じられない。

一方、教育面において、着任後デザイン専攻だけでも300名近くの学生とふれ合ったことは、人生の内でも最も楽しいものであった。着任当初の小生は、もちろん若かったためではあるが、特に卒業制作時になるとよく徹夜して学生の手伝いをしたものである。ついつい制作に熱が入ると自分で学生の道具を取り上げてしまっており、気がつくと当の学生は横で寝ているといったこともしばしばであった。また、早朝大学に来ると段ボールにくるまって寝ている女子学生も多く、気をつけないと踏みつぶしかねない状態であった。現在は、学生の健康管理、大学の防犯・防災などから許されなくなっており致し方ない面もあるが、大学教育において何かが失われたような気がする。

小生は幸いにも企業、デザイン事務所に勤務し、自身のデザイン事務所の経営、地方自治体におけるデザイン振興のお手伝い、そして国家公務員として大学で教えるといった多方面の仕事に携わることが出来たという大変な幸運に恵まれた。小生にとって最後の職場であると思われる高岡短期大学での11年間は、今振り返るとあっという間であったが、実にいろんなことに携わることができて楽しい時間であった。

高岡短大の思い出

地域ビジネス学科長　近藤　潔

最初の印象

高岡短大には平成７年３月１日付けで赴任しました。千葉から富山まで冬の曇天に車で走ったことがなつかしく思い出されます。古い手帳をひっぱりだして見ると、２月27日でした。私はもともと造船が専門で、日本鋼管(現 JFE)の造船部門(現ユニバーサル造船)の研究所に16年間勤務し、その後、コンピュータ関係の仕事を７年間行ってから高岡短大へ来ました。ほとんどが研究所勤務とはいえ、教壇にたった経験は一度もなく、また、富山県に来るのははじめてで、不安と期待のまじった複雑な心境でした。

高岡短大へは２月28日にはじめて行きました。このときの印象は「すばらしく美しい場所」というもので、この印象は現在も全く変わっていません。造船業の研究所は大体が工場の中にあり、設備・環境や勤務時間なども工場を基準にできていました。作業服にヘルメットをかぶり、安全靴をはいて朝早く全員で体操をすることから一日がはじまるのが普通でした。居室は大部屋でいろいろな人がいそがしく行きかうといったそれまでの環境から、ゆったりとした二上山の麓に建てられた静かで美しい校舎の中に移ったわけで、ある種のカルチャーショックを感じました。

自然を楽しむ

富山県の人は身近にある雄大な自然についてあまり意識していないように見えます。身近にあるものよりも手に入りにくいものに憧れるという意味では、都会育ちの人が自然に憧れるのも富山の人が大都会に憧れるのも同じかもしれません。二上山がその一部であるかのような景観のキャンパスにはたくさんの樹木が植えられ、中でも中庭の都麻々(タブ)の木はその立派さに圧倒されます。また、あまり話題にもなりませんが、高岡短大の敷地には野性のキジが住んでいます。二上山周辺や小矢部川の河原、氷見線の敷地などかなり広範囲に渡って毎年春にはあの特徴のある声を聞くことができます。これはいまどき大変めずらしいのではないかと思います。ある春の日に二上山を歩いていると山道にキジの尻尾が落ちていました。めずらしいと思い、近づいて良く見ると、それは人が近づいたのであわてて道端のくさむらへ頭をつっこんだキジが「頭かくして尻かくさず」の格言通りに尻尾を隠しきれなかったようでした。こんな風景が見られる大学の周辺は本当に自然が豊かなところです。

こちらでは、休日に3000メートル級の立山連峰に十分日帰りが可能で、山歩きの帰りに温泉に立ち寄る楽しみに魅せられました。また、学生時代以来30年ぶりにスキーを始め、北陸の暗いと嫌われる冬も、雪が降るのが待ち遠しい冬になってしまいました。特に立山の春スキーは本当に雄大で、こんなに手軽に山スキーが楽しめるのは全国的にみてもめずらしく、一級品だと思います。その証拠に、立山に春スキーに行くと、麓の駐車場にとめてある車のナンバーの多くは東京や大阪の都会のナンバーで、その中に富山ナンバーを見つけるのは難しいくらいです。このような全国レベルの自然の価値を地元の人が再認識し、自分達がまず楽しむことができればいいのにと思ってしまいます。

融合教育

次に、急に硬い内容で恐縮ですが、高岡短大へ来てからいつも問題となり、新芸術文化学部の理念にもなっている「融合」について書いてみたいと思います。建学時に「地域の多様な要請に積極的にこたえる」ために「伝統的工業製品の発展に寄与する工芸技術、実務的な経理・経営及び情報処理、並びに外国語及び国際問題等の分野における職業に必要な能力を育成すること」が目標として掲げられて以来、芸術的な分野とビジネス的な分野の融合が常に模索されてきました。平成11年度に作られたカリキュラム改革案をベースとしてまとめられた高岡短期大学改革案の中では、上記建学の趣旨を「現在われわれが有する人的資源の状態を考慮しつつ、それぞれの専門を『融合した』カリキュラムを作成し、社会の多様な需要に可能な限り応えること」と言い替えています。

融合をめぐる議論でいつもその反対意見としてだされるものは専門能力の低下と広く浅薄な知識に対する危惧です。スペシャリストを育てるのかゼネラリストを育てるのかという議論もこれに似ています。このような方向へ議論を持っていくと、どちらも必要だということにな

り、議論がそこで止まってしまいます。これは論点が静的・分析的であり、ダイナミックでないためと思います。そうではなく、上記の建学の趣旨や改革案にもあるように地域や社会の「需要」に応えるということを論点とするならば、もっと柔軟な方向が可能になるのではないでしょうか？事実、高岡短大のウリの一つは高い就職率です。これは、大学を人材育成機関として見る地域や社会のニーズに応えると同時に、確実に就職したい学生・受験生のニーズを満たしています。高岡短大は融合した教育を実施することでこのようなニーズを満たして来たと言えると思います。

これからは4年制の大学となり、卒業生の専門性は短大以上に高いレベルが求められるようになります。しかし、教育期間も倍となり、専門教育の時間も増えるわけです。ここでも建学の精神を生かし、社会や学生のニーズに応えるべく融合教育の理念を柔軟に貫くことが肝心であると思います。

高岡短期大学２冠達成

文部科学省公募事業　教育 GP

平成16年度「特色ある大学教育支援プログラム」採択と今後の展開
―学内を学生作品で埋め尽くそうプロジェクト―

特色ある大学教育支援プロジェクトとは、文部科学省が平成15年度から実施している事業で、大学教育の改善に役立つ取組の中から特色ある優れたものをコンクール形式で選択して、この事例を広く社会に情報提供し、高等教育を改善することを目的としています。

高岡短期大学の取組は、平成16年度の公募において534件の応募の中から採択された58件の中の一つとして選定されました。その取組は「学内を学生作品で埋めつくそうプロジェクト」と題して、模擬社会としての大学環境を舞台に、生活者の視点をもった「作り手」と、自ら提案できる「使い手」の両者を育成することを目指したものです。

平成４年度に「指物法」という授業において学内食堂厨房のスツール作りをスタートとして、平成11年度には「家具制作」「造形工芸実習」「複合造形」等の授業で実践型制作と融合教育に重点をおいた授業を展開してきました。特に評価された点は、このような授業が全く新しい形式の教育形態であることや、履修学生の制作意欲・就職意欲を向上させ、実社会からの制作依頼など地域連携の誘発、教員の FD への貢献、大学構成員全体の大学への愛着心・生活者意識の醸成などの効果をもたらした点です。また、こうした成果を導くために、実社会と同スケールの課題作り、大学が発注者となる模擬の受注制作、コンペ形式での競争原理の導入、学内外の第３者による評価等の工夫を行った点も高く評価されました。

採択された大学にはそのプロジェクトを推進するための支援として重点的に予算が配分され、さらなる展開が期待されています。本学ではこの支援事業費を使って本プロジェクトを継続し、これを持続的に進化させる学内環境装置の設計というべき案を計画しました。それは本学20年間の教育成果を効果的に運用し、学内教育環境の充実と学外との連携を推進することを目的とした案です。具体的には、学生作品写真のパネル、制作工程見本や優れた教材、学生が工夫したジグや固定具等の技能の具体物等を「教育の資産」として捉えて展示し、新しい発想や工夫を促す道具として活用する計画です。また地域の特殊技能者や企業のデータベースを構築し、これを媒体として学外との連携を推進する企画です。芸術文化学部として生まれ変わった後も、この取り組みが新学部の特色として引き継がれ、学生に対して誇れる財産になることを願っています。

最後に、今回の申請・採択そして支援事業を進める中で、日々実施している一つ一つの授業を魅力と話題性に富んだものに工夫し、その成果は大学全体としての大きな特色になるように蓄積して、次の飛躍のために活用していこうという意図が必要だと思いました。それは、こうした戦略的意識を持たない限り、大学は地域や学生から求められる存在として生き残る競争力を高めることができないのではないかと思えるからです。

産業造形学科教授　小松研治

文部科学省公募事業　現代 GP

平成16年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択決定！

―炉端講義プロジェクト―

国公立私大学等がテーマの趣旨・目的にそって確実な計画のもとに新たな大学教育改革を図ろうとしているもので、我が国の大学教育改革に資する取組を対象に重点的な財政支援を行うもの。

・平成16年度現代 GP…応募総数559件、採択数86件、採択率15.4%

⑴応募　部門　　地域活性化への貢献テーマ

⑵申請　課題　　『炉端談義』方式による地場産業活性化授業
―地域と一体となった授業計画・実施・評価委員会によるものづくり教育―」

⑶実施責任者　　産業デザイン学科教授　長山信一

⑷取組の概要

本学周辺地域の銅器・漆器など伝統的地場産業はここ十数年停滞気味である。本取組はこの停滞の原因が企業・自治体その他関係団体・大学間の連携の弱脆さにあると考え、地元関係者と教員・学生で構成する「授業計画・実施・評価委員会」を組織して、地場産業振興に寄与できる授業展開を考えた。

鋳込み場の端に関係者が集まって実際にものにふれながら議論を深めるような形態を目指し、これを「炉端談義」方式と名づける(図１、写真１)。本取組では、一つの授業の成果が次の授業の素材となって活用される連鎖型授業を展開してゆくが、中間段階でも当該委員会が授業内容を点検評価して必要に応じ軌道修正を行う(図２)。また、地場産業の生の声を授業に反映し、大学の取組姿勢を地元へ説明することで公開性が高められる。

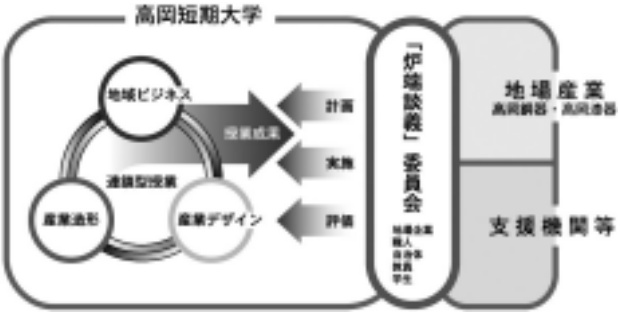


図１「炉端談義」委員会の概念図

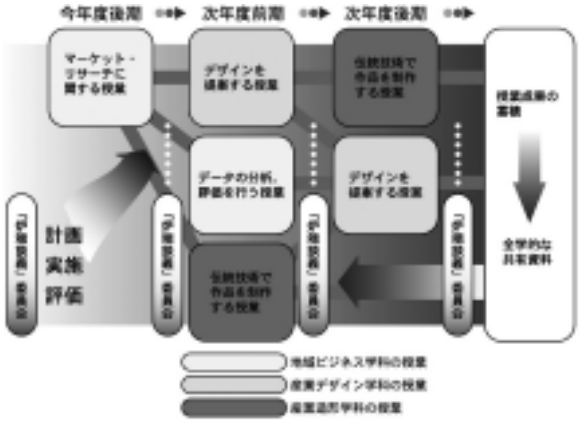


図２　「連鎖型授業」の概念図

写真１　「炉端談義」委員会のイメージ写真

本取組の申請・採択に関しては、西頭学長、水島副学長をはじめとする、本学教官・事務方の総力を挙げて取り組んだ結果が評価されたものである。

現在、２年間の授業計画の１年目を無事遂行しつつあり、前半部分である「炉端談義」プロジェクトの運用基盤となる、HPや共有データベースを立ち上げることができた。平成17年度は授業とプロジェクトをコラボレーションし、いかに成果を上げるかが課題である。

産業デザイン学科教授　長山信一

新・富山大学芸術文化学部創設記念
「東京シンポジウム」―日本の未来と、地方・芸術文化・教育―

新「富山大学芸術文化学部」創設にむけ、広報活動の第二弾として、６月10日(金)「東京シンポジウム」を開催した。長崎県立美術館長の伊東順二氏をコーディネーターとして、パネラーには、解剖学者で東京大学名誉教授の養老孟司氏、日産自動車常務デザイン本部長の中村史郎氏、建築家・慶応義塾大学教授の妹島和世氏、セイコーエプソン取締役相談役の安川英昭氏をお迎えした。

シンポジウムに先だち、西頭学長が500人を超える出席者に対して挨拶し、このシンポジウムは、パネラーの出演依頼から出席者の招待、ポスターの作成等、すべてが教職員の手づくりで行われた事を報告し、このイベント自体が「芸術文化学部」がめざす教育の一環であることを強調した。引き続き、前田学長補佐から「芸術文化学部」の五つのコースとリテラシーの説明、高岡市という自然豊かで、伝統産業が生きづく街自体がキャンパスであり、この地から世界に向けて文化を発信する旨が述べられた。その後、新学部と高岡市の紹介ビデオが会場に流れシンポジウムが始まった。

最初に伊東氏が、この４月にオープンした「呼吸する美術館―長崎県立美術館」のコンセプトについてプレゼンテーションを行い、生活の中でアートにふれる機会が増えた今日、芸術の意味や領域をあらためて問い直す必要があると問題提起した。

養老氏は、芸術というのは、それぞれの個性に基づく身体感覚の世界と、言語のように共通認識を基盤とした概念の世界を、行き来し両者を結ぶものであるとし、都会には概念の世界が優先されているため、自然豊かな地方での芸術教育を行う優位性について語った。

日産自動車のデザインチームを率いてきた中村氏は、芸術は自分の世界を表現するもので、使い手の生活を豊かにすることを目指してきたデザインの世界とは違うと考えてきたが、最近では人に喜ばれるものを創るのがアートというふうに変化してきている。両者の境界があいまいになり、共に、人に対してメッセージを送るという点においては、アートもデザインも同じであることを強調した。

平成17年６月10日（金）

世界中でプロジェクトを遂行中の妹島氏は、作品を紹介しながら、各地の風土や文化の違い、様々な人々とのコラボレーションの結果、自分の作品が変わってきたと語りつつ、各地域の固有の価値を認めてゆくことの大切さを指摘した。

長年、教育問題に取り組んできた安川氏は、学力だけではなく豊かな感性や礼節を兼ね備えたトータルな意味で人間力を向上させることが、国際化してゆく日本にとって重要であり、日本人の精神面の弱体化、学力の低下からくる国際競争力の低下という不安材料を挙げた。

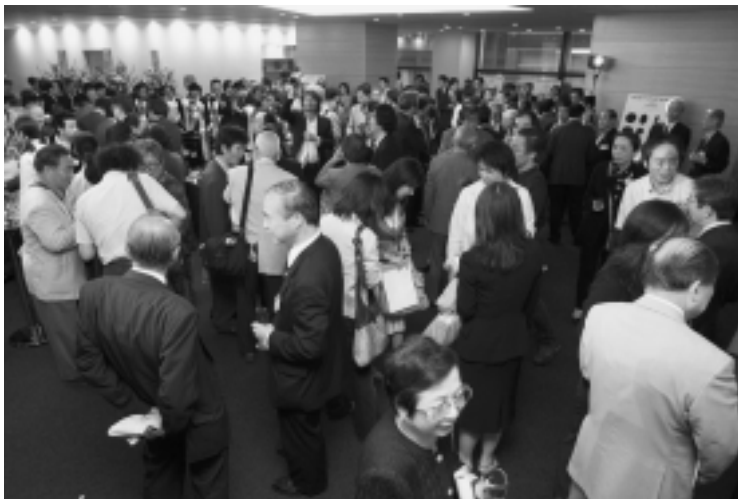
伝統的な技術は残っているが、地域や人の精神的な部分が疲弊しているという伊東氏の発言を受け、妹島氏は伝統産業が根付いた高岡に新学部ができる意義として、学生が直接、現場で職人と触れ合うことのできる環境にあること、それは、学生と職人の両者にとって有意義であると述べた。中村氏は、日産の人気車キューブのデザインは、走っていても止まっているように見えるという、車は速く走るという従来の価値観の転換からうまれたことを例にあげ、地域の独自性や美意識を大切にしてほしいと注文をつけた。養老氏は教育を料理にたとえ、包丁の使い方さえ知っていれば、何でも切ることができると基礎教育の大切さについて話した。人間力を向上させ、地域のもっていたスピリッツを形としてよみがえらせることが大切という伊東氏のまとめにより、新学部での教育と芸術文化創造に期待を寄せシンポジウムは終了した。

一部のシンポジウムに続いて二部の交流会を、隣接する会場で、パネラー、参加者や本学の教職員をまじえて催した。国会議員をはじめ様々な来賓の方の出席があり、６名の方にスピーチをお願いした。

村上光一氏（フジテレビ社長）、前田常作氏（武蔵野美術大学元学長）、谷公士氏（人事院人事官、元郵政省事務次官）、伊勢彦信氏（イセ文化基金理事長、イセ食品㈱会長）、濱田一成氏（地域文化デジタル化推進協議会顧問、元自治省消防大学校長）、佐藤孝志氏（前高岡市長）

その他、多数出席いただいた各界のオピニオン・リーダーの方々に、本学の教員が新学部の広報をおこなうとともに、卒業生の就職先としての人脈形成につとめた。会場には数多くの生花や祝電が届けられ盛会のうちに幕を閉じた。

産業造形学科教授　貴志雅樹



速　　報　　高岡短期大学 GP 第 3 弾達成！

文部科学省公募事業　現代 GP

平成17年度 「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に 8 月 5 日採択決定！

平成16年度の教育 GP、現代 GP に引き続き、平成17年度の現代 GP に採択

現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）とは

文部科学省が平成16年度から実施している事業。社会的要請の強い政策課題に対応して設定されたテーマについて、各大学等から申請された取組の中から特に優れたものを選定、推進することにより、高等教育の活性化を目的とする。

・平成17年度現代 GP…応募総数509件，採択数84件，採択率16.5％

⑴応募部門

地域活性化への貢献テーマ

⑵申請課題

「非言語と言語の融合による地域国際化教育」－世界に開かれた高岡まちづくり－

⑶実施責任者

地域ビジネス学科教授　渡邉康洋

⑷取組の概要

「グローバル観光戦略」（H14国交省）は、地域社会も国際化・外客誘致に向けて具体的に行動することを求めている。高岡短期大学では開学以来、地元の高岡市と密着した教育を行ってきたが、この取組は、地域づくりに関連した授業に地域組織・住民の参加を求め、さらに世界に開かれた教材「グリーンマップ」を導入することにより、この新たな地域ニーズに応えようとするものである。具体的には、これまで別学科、別区分で実施されてきた授業群を「国際化」という共通テーマで結んだ融合教育で実施し学生の国際感覚を育む。特に授業では地域に埋もれた文化資源を発掘した後、在住外国人や市担当部署との共同作業により、地域情報の国際的発信を可能にする。さらに地元ボランティアガイドの指導の下で、英語・中国語による観光資源の紹介体験をすることにより言語、および非言語でのコミュニケーション能力を育成する。この取組により、高岡短期大学は、高岡市を真に世界に開かれた都市へと発展させ、また国際的人材養成によりその国際化に総合的に貢献する。